乗円寺 寺報

平成30年10月
報恩講前号
寺報から訊く
寺報No19

乗円寺 改修工事状況 今後の計画！

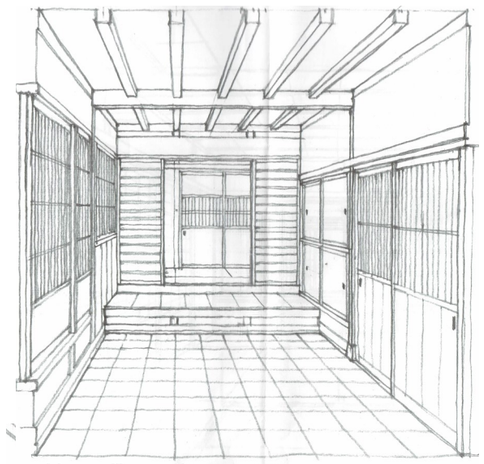
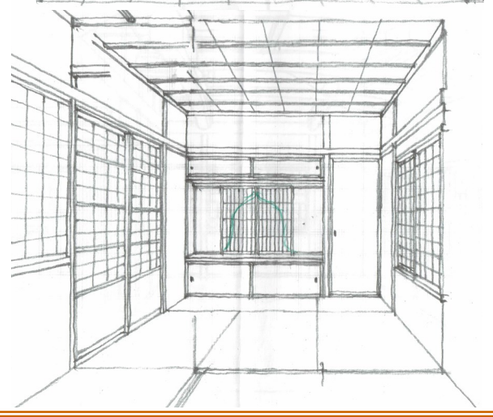
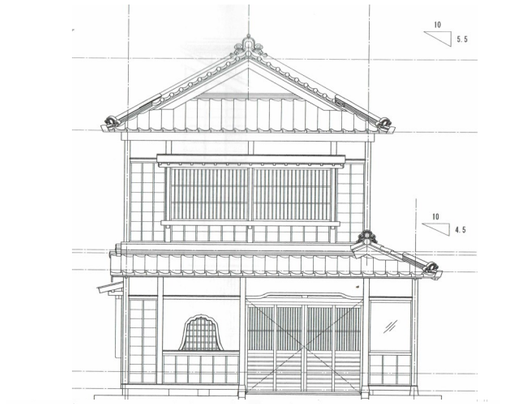
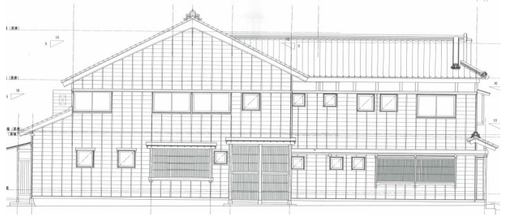
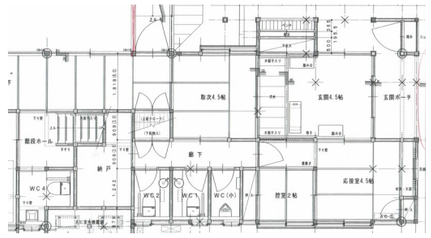
～住職より～

乗円寺の住職になり、五年が経ちました。住職になって、三年が経ったときに、これからのお寺を考え、乗円寺三ヶ年計画を立て、役員の皆さんに相談しながら少しずつ実施してまいりました。

まず最初は時代のニーズに合わせた納骨堂の改修工事、次いで現在は、庫裏全体の改修を実施しています。これは前にも少し記載させていただきました。計画は少し遅れていますが、完成すると玄関部分が大きく変わり、待合部分が出来たり、バリアフリーにも対応したようなお寺に生まれ変わる予定です。工事終了後は、門徒さんや乗円寺と関わる方々を繋げていく取り組みも、少しずつ実施していきたいと考えております。

自分がお会いしてきた、乗円寺の門徒さんや、お寺と関わる方々には、素晴らしい経験やお仕事をなさっている方がたくさんいらっしゃいます。残念ながら、現在はそれを寺族側や一部の方しか知りません。乗円寺というお寺の価値を考えた時に、この繋がりが大きな財産のように思います。よって、この寺報や、新たに集う機会を創ることで、乗円寺門徒さん同士の繋がりも生んでいきたいと考えております。こちらは乞うご期待です。

庫裏工事は「古民家再生手法」で行うため、外観を壊さず、中から工事しています。使える素材はそのまま利用！来年３月上旬完成予定！

報恩講10月4日（木）
特別法話・講話のご案内
10:30頃～詳細案内参照

2018年10月　報恩講日程

今年は4日（木）のみです

10:00～ 特別永代経
10:30～ 特別法話
「束縛からの解放 」
三橋先生
11:30～ 正信偈唱和
正午～ お斎（おとき）
13:00～ 特別講話
「認知症介護のふたつのツボ」
中田有博さん

5日の報恩講はありません。

今年の報恩講のご案内！！共に今年の御縁を振り返り、佛様に、先祖にお参りしましょう！

今年の報恩講時期は、寺が来年の三月上旬迄工事中のため、使用できない部屋が多数あります。よって毎年の報恩講とは違い、スペースが限られ、僧侶方も少ない人数で実施して参ります。その分、今年はよりアットホームに、参加しやすい内容で実施していきたいと考えています。皆さんと、永代経や、正信偈のお参り。久し振りに三橋先生をお招きして葬儀に関するお話。後から寺報にも出てくる中田さんには、ご自身の介護経験と、介護する方をサポートする自己肯定力トレーナー講師としてのお話をいただきます。（聞き手は私がつとめます）。より身近で、距離の近い報恩講となるようにして参りますので、ご参加いただければ幸いです。

裏面もあります！

発行所：乗円寺
金沢市石引１丁目4-20
TEL076-221-3421
Fax076-221-3449
✉：info@jouenji.net
印刷協力：川場印刷
寺報、発送希望がございましたらお気軽に。

乗円寺 ホームページ！！
http://jouenji.net

新企画!! 乗円寺の門徒さ～ん！

「高齢者と介護者をサポートする私の仕事」～中田 有博(なかた ありひろ)さんのご紹介～

東京でコピーライターや雑誌の編集など、広告関係の仕事を約３０年やってきた中田さん。長くやってきた仕事が、時代の変化で変わってきたことや、２０１１年春の東日本大震災を東京で経験したことがきっかけとなり、これからのことを考え金沢に戻ることを決意しました。金沢に戻ったタイミング、７年前の８月３１日、お母さんが交通事故にあい、それがきっかけとなりお母さんの認知症が発覚。自分のこれからの仕事を考えるタイミングで、親との関わりも見直す機会に直面することになりました。

広告関係の仕事をしていた２００１年に、高齢者を取材する機会があったそうです。その時に、多種多様な高齢者の生活に関心を持ち、自分が高齢者になるイメージはまだ持てなかったそうですが、サポートをしてみたいと感じるようになったそうです。金沢での生活は、以前の仕事を続ける傍ら、高齢者の今までの人生をまとめる“自分史聞き書きすと„の仕事と、自身の介護経験から介護する人をサポートする自己肯定力トレーナーの講師として講座や個別授業を実施されています。

中田さん自身も金沢に帰ってからは、仕事をしながらお母さんを約３年間介護されました。介護をしてみて感じたことをお聞きすると「まだまだ頑張っている人はいらっしゃるけど、自分の場合は介護にかなりストレスを感じ、体にも反応が出ました。母の気持ちを尊重すると、自分のペースが乱れる。仕事もセーブしがちになるし、いろんな手続きや相談で忙しくなる。いきなり、散歩に行きたいと言われると転倒の危険性もあるから付き添う。夜中もトイレに行くと、その様子を見る習性が身に付き、常に気を張ってゆっくり休まらない。ストレス解消の場もないから、家族の方が介護者にあたってしまうのも、理解出来るなと感じていました。」と話されました。

そんな時に救われたのが新聞の記事。“人間は、自分の人生を生きるために生まれた„この記事から、ハッとして自分を大切にしながらの介護に、気持ちを切り替えることが出来たそうです。お母さんが介護施設に入った今は、１週間に１～２回見舞いに行き、空いた時間を利用しもっと勉強するために、自分史活用アドバイザー・ハッピーエンディングプランナーなどの介護分野や、高齢者に関わる講習などを次々と受講され勉強されています。

自己肯定力トレーナーの講師となった今、自分が介護の経験をしたこともあり、介護で苦しんでいる方のサポートをすることも使命と感じているそうです。そんな同じ立場にある人に、メッセージをお願いしました。「いちばん伝えたいことは、自分のことをいちばんに考えていいということ。介護する人をいちばんにすると、時間が経つにつれ、自分が潰れてしまいます。自分を満たしているからこそ、相手を思いやれるのです。」

去年、お母さんを納骨堂に連れて来られた時の優しい対応がとても印象的でした。その裏側にはこんな経験とお考えがあるのですね。講師としても活躍されているので、多くの方と関わりを持ち、ご自身の経験を伝えることで気持ちも楽になる方が増えるはずです。今後の中田さんの活躍に益々期待です。

老僧の独り言 印象に残る葬儀② 薬莢(やっきょう)のお輪 ～野辺の送り～

戦後７３年。毎年巡って来る終戦記念日も去りました。７０年以上の歳月が流れても、実際に戦場で第一線部隊に属し、雨霰のように飛来する敵弾を潜ってきた私には、昨日のことのようにその実態が脳裏を掠（かす）めるのです。次のようなことがありました。

昭和１９年の春に始まった支那（現在の中国）大陸打通作戦の一環として、北部では京漢（ケイカン）作戦、南部では湘桂（ショウケイ）作戦と名付けられ、同時に展開されました。この大作戦の初期、私の参加していた湘桂作戦も始めの頃の戦闘では常に優勢であり、どんな敵部隊に遭遇しても瞬時にこれを撃破して進撃を続けていました。そんな時、わが中隊に最初の壮烈な戦死者が出ました。岐阜出身の初年兵でした。

作戦開始後、最初の戦死者でしたので中隊全員が、その死を悼む心が強く、誰からともなく野辺の送りをしようとの気運が高まり、中隊長も承諾しました。私達の中隊は愛知、岐阜出身の兵隊が多く大半が真宗門徒でしたので、その中の１人の班長が中心となり、お通夜兼葬式をすることになりました。敵が既に遠くに去った後でしたので、中隊全隊が何となくゆったりとした雰囲気の中で準備が進められました。

接収した農家の土間に全員が集まり班長の提案で、正信偈（帰命無量寿如来―）を唱和することになり、導師は私、お輪（りん）を鳴らす役は班長が自ら買って出たのですが、その時になってハッとお輪の無いことに気が付いたのです。「何かないか！！」と慌てた班長の問いかけに１人の弾薬兵がすかさず応じました。「薬莢（やっきょう）はどうですか？」と。「それがいい、すぐ持って来い」との班長の判断で、すぐさま薬莢が持ち込まれお通夜が始まりました。（薬莢：弾砲の発射薬を詰める容器であり、これを用いると弾頭や火薬を銃砲へ迅速に装填する事ができる。使ったのは四一式山砲の薬莢。長さ約３０センチ、口径７５ミリの真鍮製）使った薬莢は、純正の真鍮製なので「ジャーン」と素晴らしい音がします。中隊全員の心のこもったお通夜（野辺の送り）であり、最初の戦死者でしたので特に深く印象に残っています。なんとも云えない、厳粛な儀式でした。

薬莢

全身に数発の敵弾を浴び、血まみれになって「母ちゃん―母ちゃん―」と母を呼びつつ、動かなくなっていったあの若い兵隊の心を偲ぶのです。どんなにか生きて母のところに帰りたかったであろうに・・・・・。

３００万人を超す戦争犠牲者の数を聞く度に思います。「戦争は絶対にすべきではない。」と。以後連続して、行われた戦闘で先述の班長を始め正信偈を一緒に唱和した兵隊十数名が戦死しています。合掌